

アイヌ語千歳方言の再帰接頭辞 *yay-* と *si-* について*

佐藤 知己

The Reflexive Prefixes *yay-* and *si-* in the Chitose Dialect of Ainu

Tomomi SATO

要旨 : It is known that Ainu has two reflexive prefixes *yay-* and *si-*. The difference between these prefixes has been said to be the following: *yay-* is intentional, while *si-* is unintentional. However, there are a number of cases that this explanation does not work well, since *si-* may be used to express various activities that are clearly intentional. In this article, I try to explain the difference systematically in terms of the notions of “direct reflexive” and “indirect reflexive.” In the direct reflexive (*yay-*), the coreferential subject participates in the activity directly, while in the indirect reflexive (*si-*), it participates in the activity only indirectly either in the sense that the subject “does” the activity only with the help of some other person or in the sense that the subject is related to the activity merely locationally.

キーワード : 再帰、アイヌ語千歳方言、直接再帰、間接再帰

1. はじめに

アイヌ語に再帰接頭辞として *yay-* と *si-* という二つの形式があることは古くから知られていたが、両者の差異についてはこれまで必ずしも納得の行く説明がなされているとは言えないように思われる。以下では両者の差異を千歳方言のデータを元に検証してみることにしたい。

2. 先行研究

議論に入る前に、以下に主な先行研究をあげる（必ずしも網羅的なものではないことをお断りしておく）。

2.1. 金田一京助

金田一(1931: 149):

再帰動詞の形に二通りある。*yai-* を添へること、*shi-* を添へること。*pusu* は水中から地中からなど出す意で、*yai-pusu* は自身を出す即ち出づること。*shi-pusu* も自

分を出す即ち出づる意であるが、yai- の方は意志的、shi- の方は無意志的である。

Hekachi petorun raukushte aine yaipusu.

男の子が 川の中へ くぐつて やがて 浮び出た

Rai ainu shipusu ranke shipusu ranke mon shiriki.

死 人が 浮び出で つゝ 浮び出 つゝ 流れて みた

こゝへ a-pusu を対照すると、a-pusu は他の力（例へば水の力）で浮く、yai-pusu は自分の力で（泳いで）浮び出づる意。shi-pusu はおのづから浮び出づる意。yai-、shi-、が附いて、単に自身の意に止ること、中相になること、各々にある。

金田一の説明は、その古さにもかかわらず適切な例を用いた説得力のあるものであるが、「意志的」、「無意志的」という規定自体はどちらかと言えば意味的というべきものであって、文法的な説明としては若干不十分な点があるように感じられる。特に、後で述べるように「意志的」、「無意志的」では必ずしも説明しきれない事例があるという点を考慮すると、今少し精密化が必要ではないかと思われる。

2.2. 知里真志保

知里(1974: 96):¹

yai-（中略）動詞に附いて「自身に」「自身を」の意味を表はす。但し中相になることも多い。

知里(1974: 97):

pusu 出す、yai-pusu 出る。shi-pusu もある。前者は意志的で後者は無意志的。

知里(1974: 98):

shi-（中略）動詞に附いて「自分に」「自分を」の意味を表はす。中相になつてしまふことも多い。

知里の説明も、基本的には金田一(1931)を踏襲したもので、yay- を「意志的」、si- を「無意志的」としているということができる。

2.3. 田村すず子

田村(1956: 52):

yay- と si- に同じ日本語訳をつけたが、意義素は異なる。大体に於て yay-

¹ 知里の文法概説には知里(1973)もあるが、基本的な内容には大差ないと判断し、ここではあげなかった。

は意志のある自分を、si- は意志のない自分を表すと云える: pusu 《(沈ンデイ
タモノヲ) 浮カバス》、yaypusu 《自分デ (泳グナリ何ナリシテ) 浮キ出ル》、sipusu
《ヒトリデニ浮キ上ル》。化石化したものに於ては、これはあてはまらない。なお、
si- は 'i-、yay-、'u- のようにいろいろな他動詞に自由に接合することはできな
い。その意味で、これらと同じ資格で扱うことはできない。

田村(1988: 66-67):

yay- 「自分」(再帰相)

yay-kik 「自分を打つ」: kik は、「一を打つ」。

yay-nuyna 「かくれる、身をかかす」: nuyna は、「一をかかす」。

si- 「自分」(中相)

si-pusu 「ひとりで浮き上がる」: pusu は、「(沈んでいたもの) を浮き上がら
せる」。

si-etaye 「引っ込む」: etaye は、「一を引っぱる」。

田村(1996: 622):

yay- ヤイ² も《自分自身》を示す再帰の接頭辞だが、意味・用法に違いがある。
yay- ヤイ は、それが目的語として接頭している他動詞の主語と同一人物を指す
が、si- シはそうとは限らず、多くの場合、それが接頭している語が含まれている動
詞句の(したがってその節/文の)主語と同一の人物を指す。同じ語に yay- ヤイ、
si- シの両方がそれぞれ接頭してできた対の語もある。次の一対の例では、yay- ヤ
イ- が意志のある自分を示し、si- シ- のほうは単に他動詞を自動詞化している。」
yaypusu ヤイプス (もぐっていた人が) 自分で泳ぐなり何なりして浮いて出る。
sipusu シプス (沈んでいたものが) ひとりでに浮き上がる。(W)

田村の説明も、基本的には金田一、知里同様、yay- を「意志的」、si- を「無意志的」
とするものと言ってよいであろう。

2.4. 中川裕

中川(1995: 204):

si- 【接頭辞】 自分を。自分に。自分の; 動詞のとり名詞の数をひとつ減らす。

例: si-turi 「自分・を伸ばす」= 「伸びる」。si-pita 「自分・をほどく」= 「装束を解

² 原文ではハイフンがある表記とない表記とが混在しているが、原文のままとした。

く」³。

中川(1995: 384) :

- yay- 【接頭辞】 ① 自分を。自分に； 動詞のとり名詞の数をひとつ減らす。
② 自分の。yay-kotan-ka epunkine 「自分の・村の・上を守る」。

中川は少なくともこの時点においては yay- と si- の違いについては特に指摘を行っていないようである。

2.5. 切替英雄

切替(1987)は、『アイヌ神謡集』中の用例に基づいて、si- が「受動的」、yay- が「他動作主的」という特徴付けを提唱している。また、si-ko-ruki 「飲み込む」という例から、si- が「外部から内部へ」という方向性を有するのに対し、yay- は「内部から外部へ」という方向性を有し、この違いはやはり「受動的」、「他動作主的」の区別に由来するのではないかと述べている。

切替の所説は「意志的」、「無意志的」という従来の意味に傾斜した説明から大きく踏み出して、文法的な側面に言及した野心的なものとして高く評価できるが、基本的な事例を整合的に説明していない点があることも否定できない。たとえば、例としてあげられている yay-kor-e 「自分に持たせる (=持つ)」は確かに yay- が kor 「持つ」の「他動作主」であるが、同じく例として挙げられている yay-otuwass 「自分を誉める (=自信を持つ)」は通常解釈では yay- を受動者と考える他なく、yay- を他動作主的とする解釈との整合性がない。また、si-kor-e を、「親 i が自分 i を子供に持たせる」と分析し、「子を産む」という意味になる、と説明して、si- が「受動的」である証拠であるとするが、これ自体は si- を受動者と解釈できるから良いとしても、今度は yay-pusu 「自分を出す (=浮かび出る)」のような例における yay- の処理に困難が生ずる。yay-pusu の yay- は、yaykore の yay- と並行的な意味では他動作主的とは言えないので、事実とうまく合わない。つまり、yay-kor-e は「自分が・ーを持つ・ようにさせる」と解釈できるので yay- を「他動作主的」とすることは理解できるが、yay-pusu の場合は yay-pus-u と分析したとしても、pus という他動詞はそもそも存在しないので、yay- を「他動作主的」とするためには別途何らかの補足的説明が必要になるはずであるが、この点について切替は何も述べていない。切替の説は注目すべきものではあるが、やはりこのままでは十分な説明になっているとは言い難く、少なくとも何らかの改訂が必要であろう。

³ 「装束を解く」という一般に能動的と考えられる行為に対してなぜ「無意志的な」si- を含む形式が使われるのか、ということは問題である。今後も検討が必要であるが、ここではひとまず語用論的な問題としてとらえ、例外的事象とはみなさないことにする。つまり、「装束を解く」ことは、アイヌ文化では「弛緩する」、「(自然に)緊張を解いた状態になる」という自発的な事象としてとらえられているのだ、と考えておく。

3. 千歳方言における yay- と si- の用法

先行研究の検証のため、以下では筆者自身の調査データから、yay- と si- の用例をみていくことにする（特にことわらないかぎりアイヌ語のデータは白沢ナベ氏のご教示による。記して感謝申し上げる）。

3.1. yay- の用法

以下では主な yay- の用法を、便宜的に 1) 非使役的な他動詞の目的語の位置を埋める場合⁴、2) 使役的な他動詞の目的語の位置を埋める場合、に分けて挙げる。

1) 非使役的な他動詞の目的語の位置を埋める場合

(1) pirka hi e -yay -reka.

きれい 事 ついて-自分を-誉める

「(彼女が) 美人であることについて自画自賛する。」

(2) ku-mantari ku-yay-ko-sina.

1SG.SUBJ-前掛け 1SG.SUBJ-自分を-向かって-縛る

「自分の前掛けを私は締めた。」

2) 使役的な他動詞の目的語の位置を埋める場合

(3) na rewsi sekor hirosima un utar haweoka korka

まだ 泊まれ と 広島 の 人々 言う けれど

okkaypo ek kuni ye a p sekor ku-yaynu kusu

若者 来ると 言う た もの と 1SG.SUBJ-思う ので

ku-hosipi. ku-yay-kimatek-ka wa

1SG.SUBJ-戻る 1SG.SUBJ-自分を-あわてる-させる て

ku-hosipi ruwe ne wa.

1SG.SUBJ-戻る 事 である よ

「まだ泊まれと広島の人々が言ったけれど若者が来ると言ったのに、と私は思ったので帰った。私はあわてて帰ったんだよ。」

3.2. si- の用法

si- にもいくつかの用法が認められる。以下では主な用法を便宜的に、1) 非使役的な二項動詞の目的語の位置を埋めるもの、2) 使役的な動詞の目的語の位置を埋めるもの、3) 「自分を-させる」で「一のふりをする」という意味を表すもの、4) 動詞に付いて位置の基点を表すもの、5) 名詞に付いて位置の基点を表し、主語と同一指示的なもの、に分けて例をあげ

⁴ yay-, si- は独立の名詞ではないが、名詞的に機能して動詞の目的語のようにふるまう。このことを「目的語の位置を埋める」と表現することにする。

る。

1) 非使役的な二項動詞の目的語の位置を埋めるもの

- (4) sunku anakne, peka ta si-pusu wa mom pe ne
エゾマツ は 水の上 に 自分を-出す て 流れる もの である
「エゾマツは水に浮いて流れるものだ。」

2) 使役的な動詞の目的語の位置を埋めて、「-してもらおう」意を表すもの

- (5) inan kun ne yakka pirka na. ku-si-kasuy-re rusuy na.
どの 人 でも いい よ 1SG.SUBJ-自分を-手伝う-させる たい よ
「どの人でもいいよ。私は（彼に）手伝ってもらいたいよ。」

eytasa ku-kimatek wa kusu k-oripak korka
あまり 1SG.SUBJ-あわてる て ため 1SG.SUBJ-畏まるけれど
kamuy ku-si-kaopiwki -re
神 1SG.SUBJ-自分を-救う-させる
「あんまり私はあわてたので恐れ多かったけれど神様に助けてもらった。」

3) 「自分を-させる」で「-のふりをする」という意味を表すもの

- (6) ku-ko-si-ranpewtek-ka wa k-an.
1SG.SUBJ-ついて-自分を-無知である-させる て 1SG.SUBJ-いる
「私は（それを）知らないふりをしていた。」

4) 動詞に付いて位置の基点を表すもの

- (7) arkamyasi e-e rusuy kusu e-si-ko-ek-te
化け物 2SG.OBJ-食べる たい ため 2SG.OBJ-へ-来る-させる
wa e-ek katu ne anan pe
て 2SGSUBJ-来る 有様 である た もの
「化け物がお前を食べたいからお前を自分のところへ来させてお前が来たという有様で（実は）あったのだが」

- (8) a-mutemusi a-si-ko-etaye.

1SG.TR.SUBJ-刀 1SG.TR.SUBJ-自分を-向かって-引く

「私の刀を私は（鞘から）引き抜いた。」

5) 名詞に付いて位置の基点を表し、主語と同一指示的なもの

(9) si-y-etok un inkar-an akusu

自分を-挿入子音-前 へ 見る-1SG.INTR.SUBJ と

「自分の前の方を私が見ると」

3.3. si- と yay- の用法の違い

千歳方言の用例をみると、先行研究における「意志的」、「無意志的」という説明がよく当てはまる事例も確かに存在する。たとえば、例文(5)の *kimatek* 「あわてる」に対して、例文(3)の *yaykimatekka* は、「意志的に、わざわざあわてる」という意味がはっきり出ているように思われる。これに対し、例文(4)の *sipusu* は、「(自然に水に) 浮く」という無意志的、自発的な動作を表している。しかしながら、意志的、無意志的、という説明ではうまく処理できないものもあることが注意される。例えば、例文(5)の *sikasuyre* 「(人に) 手伝ってもらおう」という例を、ただ単に「si- は無意志的」というだけでは明確な説明になっているとは言えないであろう（「手伝わせる」という行為自体は明らかに意志的なものだから）。田村(1996: 622)の「yay- ヤイ は、それが目的語として接頭している他動詞の主語と同一人物を指すが、si- シはそうとは限らず」という指摘、あるいは切替(1987)の「受動的」という規定が、あるいはこの点に触れるものではないかと思われるが、いずれにせよ「意志的」、「無意志的」という説明が有効である事例との相関関係が明確であるとは言えず、問題を残していると言えよう。また、例文(6)の *kosiranpewtekka* 「知らないふりをする」という例も、「si- は無意志的」という従来の説明だけでは必ずしも十分な説明ができないと思われる（「知らないふりをする」という行為自体は意志的なものといわざるを得ないから）。では、どのように考えるべきか。

結論的に言えば、yay- は「直接的再帰接辞」、si- は「間接的再帰接辞」という用語で呼ぶのが妥当ではないかと筆者は考える。すなわち、*si-pusu* も *yay-pusu* も「自分を出す」という意味であるという点では変わりがないが、*sipusu* は直接自分が手を下して自分を出すのではなくて、「自分以外の誰か、何かに自分を出させる」という一種の間接的な意味を元来有すると考えるのである。注意されるのは、意味的には自分以外の使役者の概念を含んではいるが、それは暗黙の含意で良く、統語的に表現される必要は必ずしもない（項として現れる必要がない）という点である。結果的には「自分を浮かび出させる」わけだが、「他者に依存して間接的にそうする」という含意があるために、「自然に浮かび出る」という自発的な解釈が与えられるわけである。これに対し、*yaypusu* は直接自分が手を下して自分を浮かび出させるわけだから、「(意志的に) 浮かび出る」という意味が生まれるのである。また、切替(1987)が si- の「受動性」の根拠とする *si-kore* の例は、「自分に持たせる」という意味は *yaykore* と基本的に全く同じであるが、si- に

は、「間接的に他者（この場合は神か）を通じてそうする」という含意があるために、「自然に子供を持つ、子供を授かる」という意味になっていると考えられる。注意すべきは、既に述べたように、「自発」のような意味は「間接性」から文脈によって生じるもので、si- そのものの意味とは考える必要がない、という点である。例えば、sikasuyre「(誰かに) 手伝ってもらおう」という例の場合は、「手伝う」という直接的行為そのものは他者が行うのであって、主語の関与はあくまでも「そうさせる」という間接的なものでしかない。従って「間接再帰」の si- が用いられる、と考えればよい。「無意志的」という説明ではなぜ sipusu が「自発」になり、sikasuyre が「してもらおう」意になるのかの説明が困難であったが、「間接性」という概念を導入すればこのようにどちらも無理なく説明ができるように思われる。これと関連して、他者の関与は非常に抽象的、間接的な場合もあることが注意される。すなわち、例文(6)の ko-si-ranpewtek-ka「知らないふりをする」である。直訳すれば「-について自分を知らなくさせる」ということだが、この場合の他者の関与は、「知らないのだと認識する」といういわば受動的なものである。他者に自分が無知であるという認識を持って貰うことによって、結果として間接的に「自分を無知化」しているわけである。そこから「知らないふりをする」という意味が生まれると考えられる。また、「知らないふりをする」のは意図的な行為だから、単に si- を自発とか、無意志的と記述するだけでは説明がつかないけれども、「間接性」という概念を用いれば、統一的な説明が可能ではないかと思われる。

なお、例文(7)、例文(8)、例文(9)のような、「位置の基点を表す si-」についても、これまで述べて来た「間接性」とは若干異なるけれども、やはり「間接性」という概念で説明できるのではないかと考える。これらの事例において、「自分」は運動、動作の直接の主体、もしくは対象ではなくて、単に運動、動作が行われる位置関係の基点を指しており、間接的に運動、動作に関与しているに過ぎない。このような場合にも「間接的」な si- が用いられる、と考える。

最後に、なぜアイヌ語に直接再帰の yay- と間接再帰の si- という二つの異なる形式があるのか、という点について一言する。おそらく、理論的に考えると、主語が直接的に関与してその動作を行う、というのが多くの場合、通常のパターンであるから、そのような場合には特に言語的なマーカーを与えられないのが普通であろうと考えられる。これに対して、わざわざ「有標の言語的マーカー」を与えなければならないような事態として考えられるものには二つの場合が考えられる。一つは主語が直接関与している、ということをもさらに強調的、明示的に表示する場合、もう一つは主語の関与が間接的である、という通則に反する場合を明示する可能性である。多くの言語では「再帰」を主語の直接関与のマーカーとして用い、間接関与のマーカーとしては用いないが、アイヌ語は通常の前綴のマーカー（中立的、あるいは強調的）の他に、「主語の間接関与」というある意味で異常な事態を表示する言語的手段として特別な「再帰」を有する言語である、と規定できるかもしれない。

4. おわりに

以上、ごく簡単ではあるが、アイヌ語の二つの再帰接頭辞 *yay-*、*si-* について、統一的な説明のための試案を述べた。もっとも、「位置の基点を表す *si-*」のように、なお考察が必要な問題が残されており、完全なものとは考えていない。より体系的な説明の第一歩として提案するものである（なお、本稿は科学研究費（基盤研究(C)、「古文献によるアイヌ語史の構築」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号 17520245）による研究成果の一部である）。

参考文献

- 知里真志保 (1973), 「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』3 (平凡社), 457-586
_____ (1974), 「アイヌ語法概説」『知里真志保著作集』4 (平凡社), 5-197
金田一京助 (1931), 「アイヌユーカラ語法摘要」『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』1 (東洋文庫), 1-233
切替英雄 (1987), 「アイヌ語の他動作主的再帰接頭辞と受動者の再帰接頭辞-*yay-* と *si-* について」『ウエネウサラ』1 (切替英雄私刊), 1-5
中川裕 (1995), 『アイヌ語千歳方言辞典』(草風館)
佐藤知己 (2004), 「知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と特異な言語事例をめぐって」『北海道立アイヌ民族文化研究センター』10. (北海道立アイヌ民族文化研究センター), 1-32
_____ (近刊), 「アイヌ語研究の課題と展望」(世界思想社)
田村すゞ子 (1956), 「アイヌ語の動詞の構造」『言語研究』30, 46-64
_____ (1988), 「アイヌ語」『言語学大辞典』1 (三省堂), 6-94
_____ (1996), 『アイヌ語沙流方言辞典』(草風館)

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科